

第4節 午王山遺跡と弥生時代の動向

石川 日出志

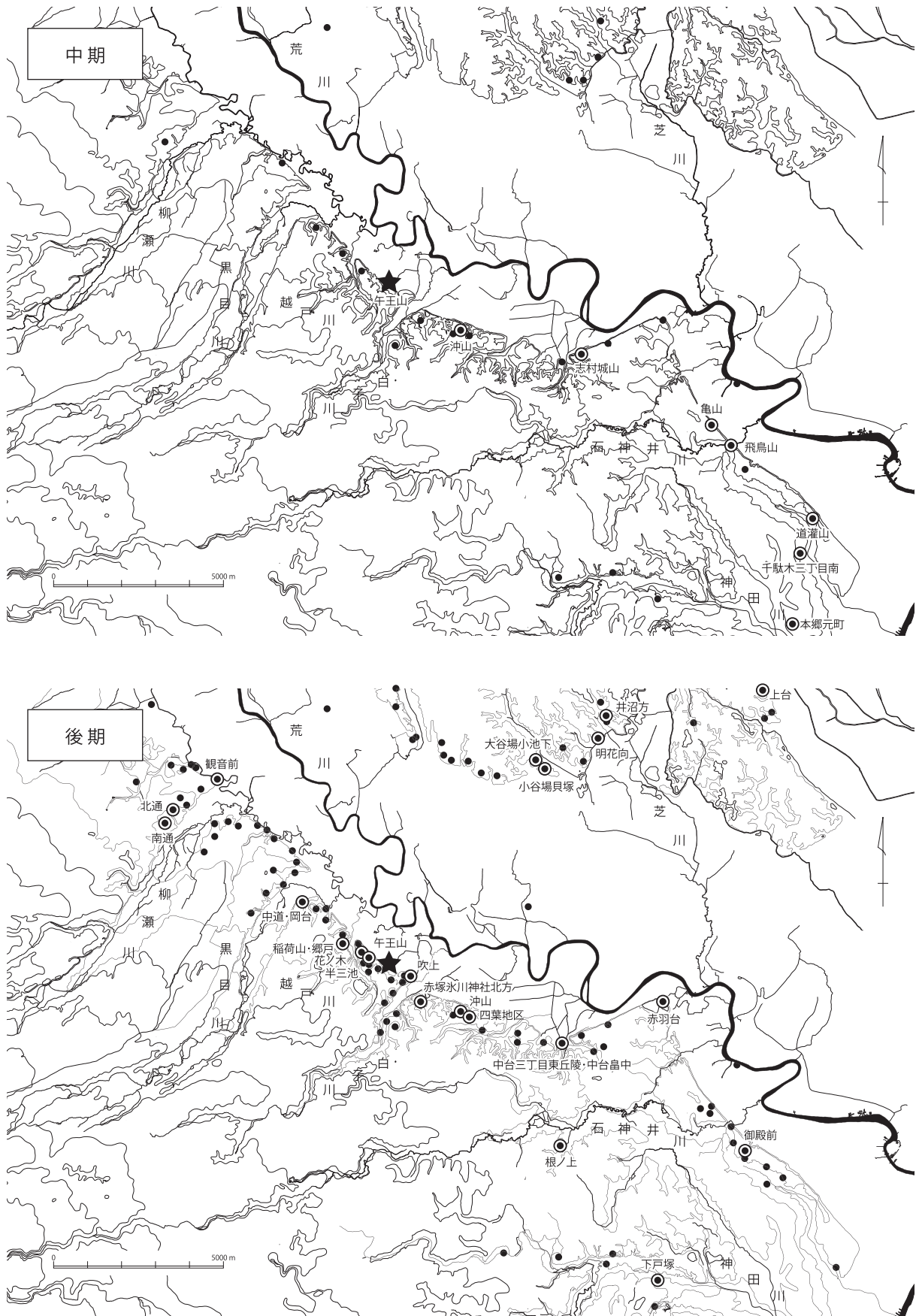
1 午王山遺跡とその周辺の遺跡分布

これまで15次にわたる調査のデータと資料を今回統一的に再検討した結果、午王山遺跡が営まれたのは弥生時代中期後半と後期前半～後半であり、後期初頭は空白期のように、なおかつ後期後半でも弥生町式土器段階の直前には終焉を迎えることが明らかになった。後期の集落が継続する途中で環濠が二重に巡らされた可能性が高いことも確認できた。

本遺跡は、北側に荒川低地を望む武蔵野台地北縁に位置し、深い浸食地形が南側を横断するために独立丘となっている。荒川流域のみならず、関東地方の弥生時代遺跡でこれほど明確な独立丘に集落が形成された事例はきわめて稀であり、個性的な立地といつてよい。どの時代の遺跡も、その遺跡が営まれた地形環境、ひいては生態環境とともに、周囲の集落で生活する人々との間に形成された社会的環境の中で存立した。したがって、遺跡群の分布状態はその遺跡の住民が生活した当時の生態的・社会的環境を知る手がかりとなる。第248図に弥生時代中期と後期の本遺跡周辺における遺跡群の分布状態を示した。まず中期（上）と後期（下）を比べると、遺跡のほとんどは台地の縁辺部に立地し、分布密度は武蔵野台地側で高く、大宮台地で低いという傾向は共通する。しかし、もう少し具体的に見てみよう。

関東地方で本格的な灌漑稲作を基礎とする集落が出現するのは中期中頃の中里式・池上式土器段階である。しかし、この段階では足柄平野の中里遺跡、小櫃川下流域の常代遺跡、北武蔵域の池上遺跡などごく限られた遺跡しか明確でなく、これまで荒川下流域ではこの段階の遺跡は把握できていない。ところが、中期後半の宮ノ台式土器段階になると、南関東各地の河川流域に灌漑稲作農耕集落群が形成される。武蔵野台地北縁（第248図上）でも、下流側から文京区千駄木三丁目南遺跡・荒川区道灌山遺跡から板橋区沖山遺跡まで数km間隔で、1～2haほどの規模をもつ環濠集落が形成され、その間にも小規模集落が点在する。ところが午王山遺跡周辺は集落が比較的まとまるが環濠をもつ大型集落はみられず、黒目川よりも上流では遺跡分布が稀薄となる。本遺跡から約27km遡った坂戸市木曽免遺跡で環濠集落が確認され、附島遺跡などもあるが、宮ノ台式土器を伴う遺跡の分布密度は低くなっている。また、荒川北側の大宮台地でも宮ノ台式土器を伴う遺跡や環濠集落がみられるが、遺跡は小規模で分布密度も疎らである。

後期になると遺跡の分布密度は飛躍的に高くなる。第248図下では北区御殿前遺跡周辺の遺跡群と赤羽台遺跡群周辺の間の遺跡分布が薄く見えるが、遺跡調査地点の粗密が反映した見かけ上の姿である。実態は、石神井川下流域から柳瀬川下流域までほぼ連続する状態である。それどころか、ここでは別の遺跡としてプロットされていても、今後の調査によってはひとつの遺跡としてまとめられる可能性のある遺跡群も少なくない。ただし、中期後半から後期になって突如このような遺跡分布の変化が起きたのではなく、後期でも初頭から前半の遺跡は中期後半以上に疎らな分布密度であり、むしろ後期前半から後半にかけて遺跡分布の急激な変動が起きている。そうした遺跡群動向を念頭におきつつ第248図下をみると、板橋



第 248 図 午王山遺跡周辺弥生時代遺跡分布図 (◎は環濠をもつ遺跡)

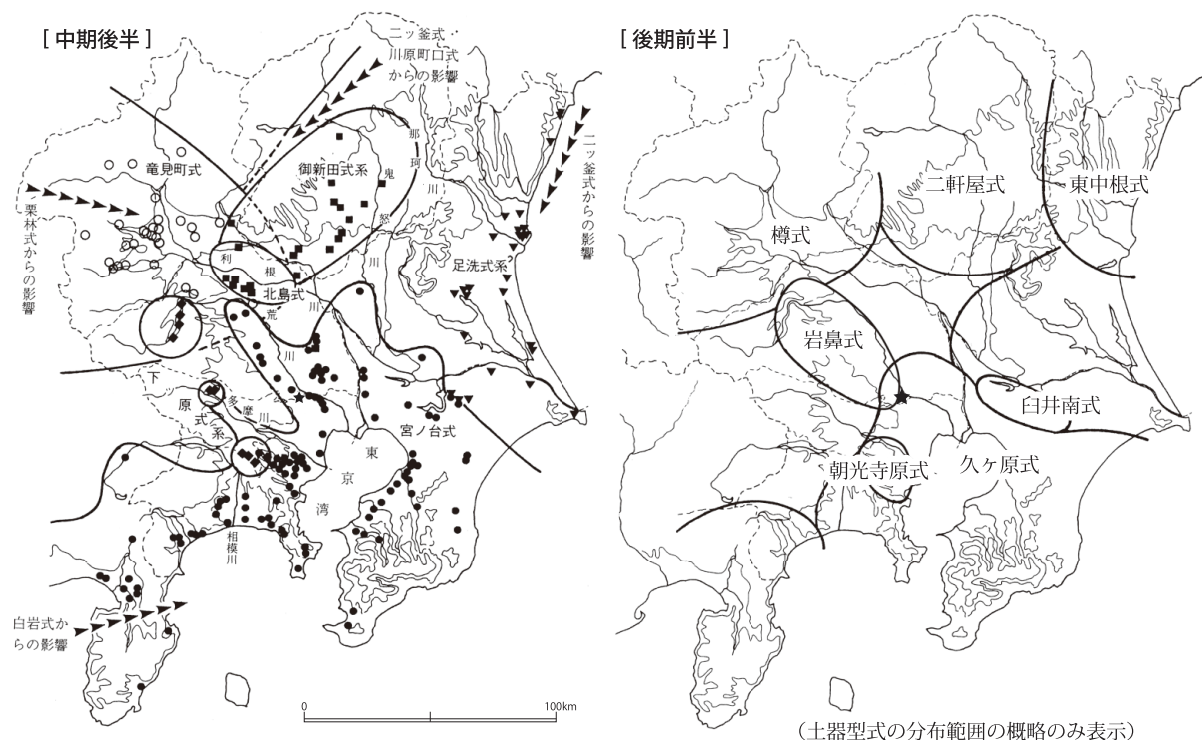
区四葉地区・沖山遺跡から黒目川までの約7kmの範囲に環濠を備えた遺跡が密集することがわかる。午王山遺跡は、その中で白子川下流域左岸側の独立丘に立地する、二重環濠をもつ可能性が高い集落であり、これら遺跡群の中核的な位置を占めた可能性が高いであろう。

2 関東における中・後期の土器型式分布の中の午王山遺跡

午王山遺跡の特色のひとつに、南関東系と北関東系、あるいは遠隔地系の土器型式が明瞭な点が挙げられ、当時の人びとの地域間交流や社会関係を知る手がかりとなっている。第249図に関東地方における弥生時代中期後半と後期前半の土器型式の分布圏を示した。現代社会感覚で過去の関東を一つの地域として認識するのは誤りであって、時代ごとに関東内の地域ごとの差異が顕在化したり、薄らいだりする。通史的にみると、弥生時代はもっとも地域ごとの差異が顕著な時代であり、中期と後期でも違いがある。

中期後半（第249図左）では、南関東は静岡県域方面と運動性の顕著な宮ノ台式土器、北西関東は長野方面と酷似する竜見町式、茨城県域周辺は東北地方南部と強い関連をもつ足洗式などの諸型式が分布し、それらに挟まれるように在来系の伝統の色濃い御新田式・北島式土器、および長野系と在来系の折衷とみられる下ッ原・馬場式系の土器群が分布する。しかも、各遺跡ではいずれかの型式が圧倒的多数派を占めているために、分布境界を明瞭に線引きできるという特色をもつ。その中で、午王山遺跡は宮ノ台式土器分布圏に属しており、前述のように荒川流域における遺跡密集地の北縁寄りに位置する。そのために第133号住居跡の大型壺の頸部突帯などは典型的な宮ノ台式土器というよりも、東松山市代正寺遺跡など、より上流側の地域の特徴をもつ。

後期前半（第249図右）になると、中期後半に周辺地域との関連が強かった土器型式が各



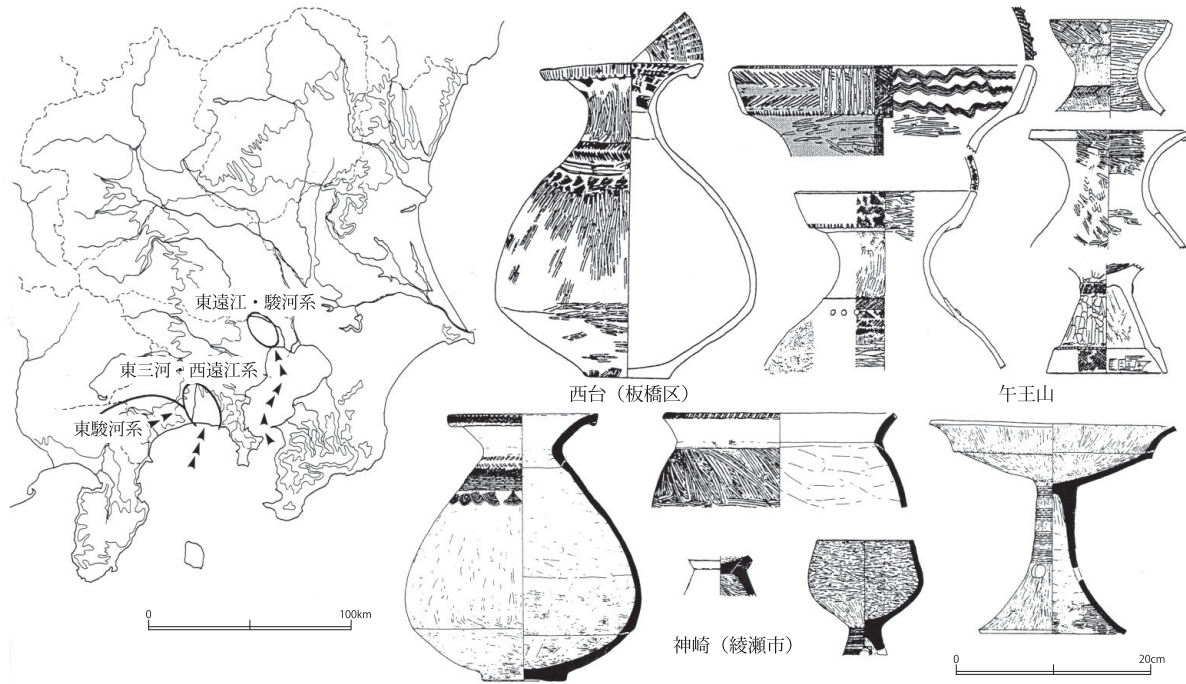
第249図 関東の弥生時代中期後半と後期前半の土器型式分布（左：石川 2008 に加筆）

地に定着して新たな地域ごとの個性が顕在化する。宮ノ台式の後裔である久ヶ原式はやや分布範囲を狭め、荒川流域では中期後半の竜見町式の後裔である樽式と兄弟型式である岩鼻式が顕著な分布圏を形成する。午王山遺跡は、南関東系の久ヶ原式と北関東系の岩鼻式土器が共存しており、両地域どうしが交流や交易を行う拠点としての役割を果たしたに違いない。

なお、中期後半から後期前半への変遷の過程で、午王山遺跡は後期初頭に一時的な空白期を挟んでいるようである。丘陵上の平坦地の約2/3を発掘したとはいえ、未調査区にこの段階の遺構・遺物が存在する可能性は残されている。ただし、たとえ後期初頭の遺構・遺物が存在したとしても遺跡の低減・縮小期であることは変わらないであろう。しかし、このことをもって本遺跡の個性的な特徴とみてはならない。例えば、かつて西川修一氏が相模川下流域をとり上げて弥生時代中期後半から後期にかけての検出住居数を集計し、後期初頭の検出数が著しく少ないことから、あたかも無住の地のような状況であったと述べた（西川1991）。その後、相模地域でも後期初頭の住居検出は増えたものの激減していることに変わりはない。宮ノ台式土器から久ヶ原式土器への土器型式の変遷が追える東京湾沿岸でも後期初頭の遺構・遺物の検出数は激減しているし、南関東のみならず関東・中部地方一円でも同様の傾向が確認できる。後期初頭における午王山遺跡のしばみ現象は、より広範な地域で連動して起こった現象として考える必要がある。

後期中葉になると、南関東の土器型式群に大きな変動が生じる（第250図）。それは第249図の久ヶ原式土器分布圏内の西半部の各地にみられる現象で、東海方面に由来する土器型式の影響が著しくなる。相模川西岸南部域では東駿河系の土器型式が分布圏を広げる。ところが、相模川流域では、かつて寄道式・伊場式と呼ばれた東三河・西遠江の土器型式が突如出現する。特に綾瀬市神崎遺跡は面積約0.5haを環濠で囲む集落で、在来系の久ヶ原式土器は5%未満にとどまり、出土土器の95%以上は東三河・西遠江の特徴をもつものであった（第250図下段：村上ほか1992）。土器の混和材は相模川流域のものであることから当地域で製作されたと考えられるものの、土器の製作技術と器種組成は故地のものとほぼ一致する。土器だけでなく、竪穴住居も短軸上に炉をもつことも東海方面に類例があり、竪穴住居に重複がないことから短期的な移住者のムラと判断された。その後の調査で、竪穴住居の重複例は確認されたものの、短期的な移住者のムラという評価は変わらない。そして神崎遺跡だけでなく、相模川流域では東三河・西遠江の土器型式が顕著な遺跡が各所に存在しており、これを契機として遺跡数と検出住居数が飛躍的に増加する。

これに対して武蔵野台地の東縁部では、東遠江の菊川式土器の影響を受けた土器が顕著となる。神田川流域の新宿区下戸塚遺跡は菊川式土器の影響が特に顕著で、下戸塚式土器と命名されている（斎藤2010）。さらに板橋区西台遺跡では、ハケ刺突による羽状文や扇形文を施し菊川式そのものというべき細頸壺が出土しており、午王山遺跡でも下戸塚式土器が顕著である（第250図右上）。ただし午王山遺跡で、壺の中に受口状口縁をもち、その下端に刺突列を連ね外面に羽状縄文を施す実例があり、その特徴は東遠江よりも駿河地域で菊川式の影響が顕著となる段階にみられる一群であり、ここでは東遠江・駿河系としておく。ただし、相模地域の東三河・西遠江系土器では神崎遺跡を代表例として故地の土器の特徴を色濃く保持し、器種組成も再現性が高いのに対して、東遠江・駿河系当地域や本遺跡の東遠江・駿河

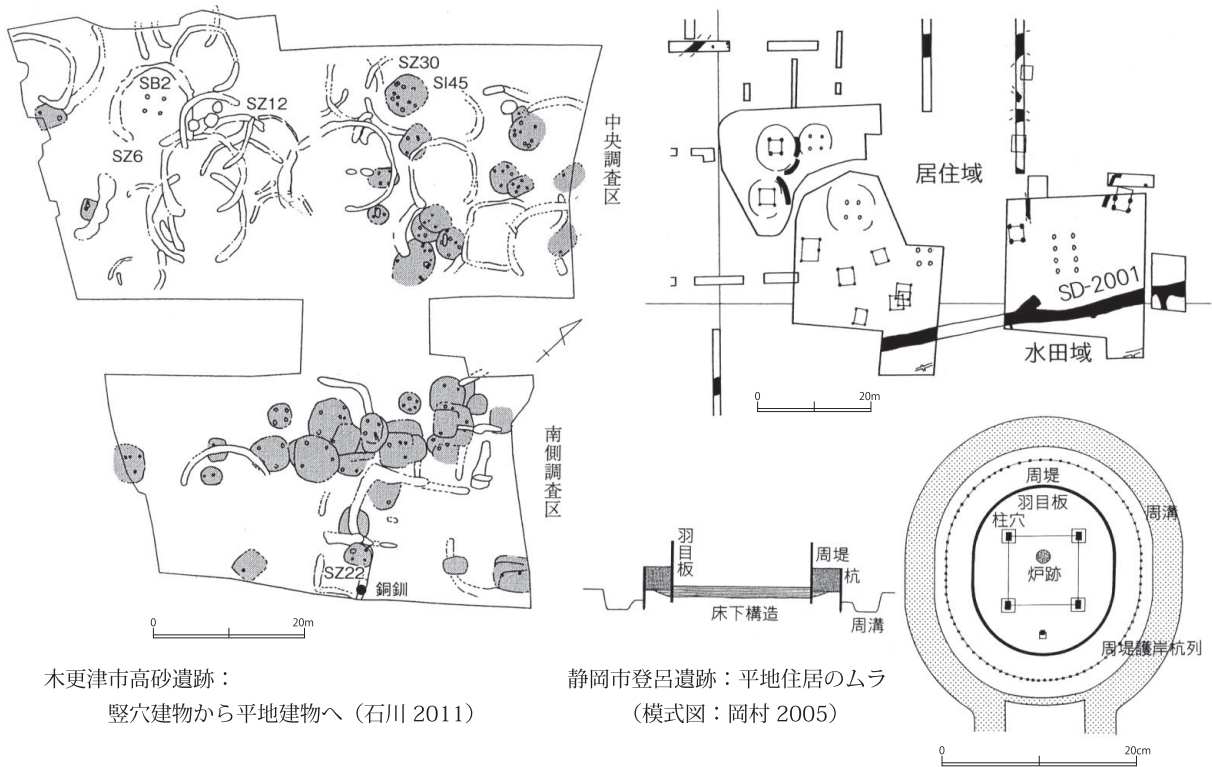


第 250 図 弥生後期における東海系土器の関東への普及
上段：東遠江・駿河系、下段：東三河・西遠江系

系土器はその比率がやや低く、さらに東海系土器のなかでは壺の比率が高いという違いがある。しかしながら、在来系である久ヶ原式土器分布圏の西半部が東海地域に由来する外来系土器の定着によって大きな構造変換を起こしていることは注目に値する。

3 住居構造にも東海系が現れる

それでは東海系の影響が顕著になるのは久ヶ原式土器分布圏でも西半部だけで、東京湾東岸域はその圏外だったのであろうか。そうした疑問に答えてくれるのが、木更津市高砂遺跡の住居群である（第 251 図左）。高砂遺跡は中期末の宮ノ台式最新段階に形成され始めた、小櫃川流域の低地に立地する集落である。図は後期の住居群が密集する地区で、網かけしたのが竪穴住居でいずれも後期前半に属す。これらの竪穴住居群を切って、図の下方が途切れるほぼ環状の溝が折り重なっている。このうち溝 SZ6 は SB2 を中心にめぐっており、SB2 が 4 本支柱の平地式建物であり、SZ6 はそれを囲む周溝と判断できる。他の環状の溝も柱穴は失われているが平地住居とみるべきであり、したがって高砂遺跡のこの地点は、後期前半は竪穴建物で構成されていたのが後期中葉に一斉に平地住居に変貌したことになる。こうした住居構造は南関東では先行する時期に類例はない。一方、東海方面では、静岡市登呂遺跡のように、低地に立地する弥生時代中期後半～後期の各地の遺跡で確認されている。登呂遺跡の SB2009 住居跡で床面を断ち割ったところ、厚さ各数 cm の木炭層と白色粘質シルトが 10 層も互層をなしており地下水の浸透・上昇を抑える防湿措置と考えられる。登呂遺跡は静岡平野の低地部の自然堤防上に居住域を設けており、住居は当時の地表面レベルの平地式建物で、床下に防湿措置を施し、建物の周囲に溝を巡らすという低地仕様の住居構造を採っている（第 251 図右）。こうした住居構造が、東京湾東岸の低地に立地する集落に採用されたの



第 251 図 低地性集落の出現

である。東京湾東岸に、土器型式の上では東海方面の明確な影響を見出すことはできないが、住居構造に静岡方面からの新しい文化要素の導入が実現していたことになる。これは単に住居構造の問題にとどまるものではなく、生産基盤である水田耕地に接する低地に集落を構えるという生活様式の採用であり、おそらくはそれ以前よりも水田耕地の開拓に積極的に取り組む活動の反映であろう。こうした平地住居からなる集落は、戸田市鍛冶谷・新田口遺跡や北区豊島馬場遺跡・板橋区浮間舟渡遺跡のように、荒川流域でも後期末から古墳時代前期に顕著になってくる。すでに午王山遺跡の集落は終焉を迎えた段階だが、午王山遺跡に見られる東海系土器の進出の動きが、やがてこうした動向を生み出したのであろう。

4 青銅器文化の波及

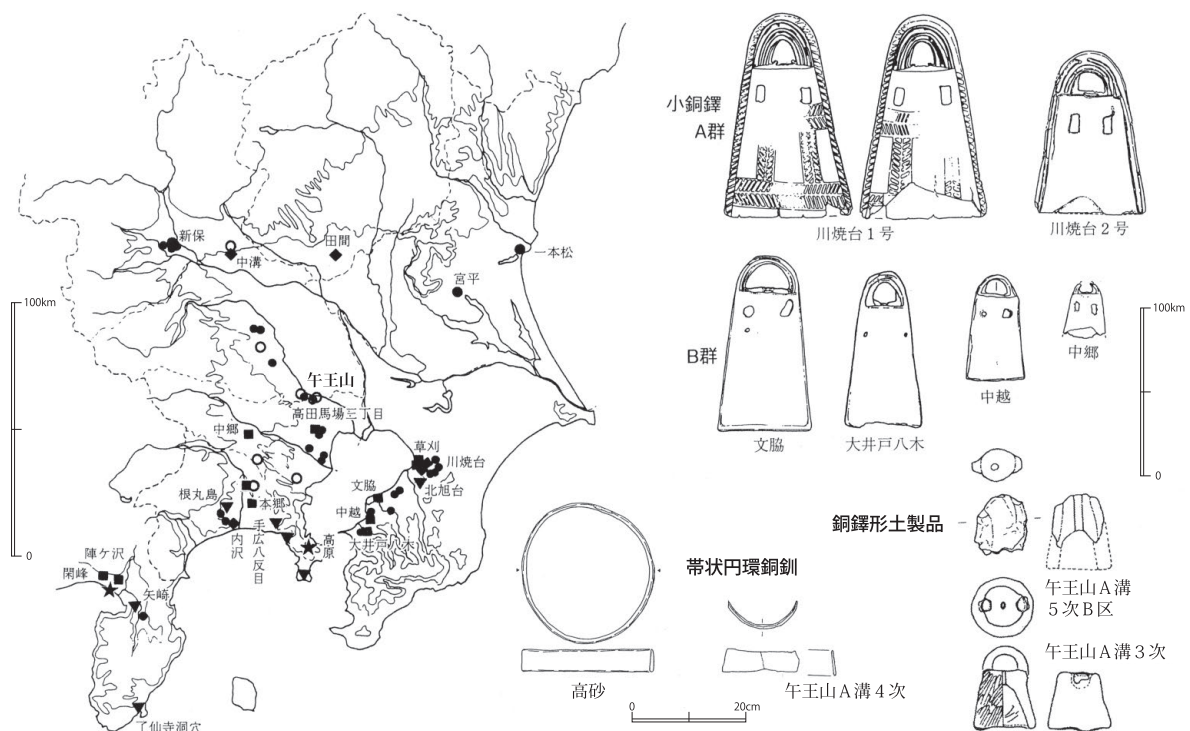
後期前半から中頃にかけてみられる南関東への東海系の土器と平地住居の波及はそれのみにとどまることはなかった。それまで関東地方に見られなかった西日本～東海系の青銅器やそれを用いた儀礼行為も採用されるようになる。午王山遺跡でもそれを知る資料が出土している。銅鐸形土製品と帯状円環銅釦である。

午王山遺跡では、A溝から3点の銅鐸形土製品（3次・5次B区・7次）が発見された。銅鐸形土製品は九州から関東まで分布しており、神尾恵一氏の集計では230点もの出土例がある（神尾 2012）。江原 順氏のデータ（江原 2016）を補記すると、関東では神奈川県で2遺跡3点（厚木市河原口坊中遺跡2点・横浜市稲荷前遺跡1点）、東京都1点（熊ヶ谷遺跡）、群馬県1遺跡1点（太田市成塚石橋遺跡）、埼玉県3遺跡6点（午王山遺跡3点・朝霞市向山遺跡2点・坂戸市下田遺跡1点）と少ないが、午王山遺跡3点・向山遺跡2点と和光・朝霞界隈に集中する。銅鐸や小銅鐸などの青銅器は高度な鑄造技術を要するために、専門の技

術者が限られた集落で鋳造したと考えられる。一方、銅鐸形土製品は土器の製作と変わるところがなく、どの遺跡でも製作することが可能であるから、特別な意義を見出そうとするのは慎重でありたいが、午王山・向山両遺跡の銅鐸形土製品は小銅鐸を識別できて初めて製作できることに注目したい。

関東地方では相模湾岸から東京湾沿岸周辺にかけて 10 遺跡で小銅鐸が出土し、群馬・栃木両県南部でも各 1 遺跡でも検出例がある（第 252 図）。それらは形態的特徴から大きく二分できる。千葉県市原市川焼台遺跡 1・2 号、神奈川県平塚市内沢遺跡、栃木県小山市田間遺跡例はやや大型で、鰭と、突線が鋳出された扁平な鈕をもち、身の横断形は紡錘形（厚いレンズ形）を呈する（A 群）。一方、他の小銅鐸（B 群）はより小形の傾向があり、鈕がほぼ円形で、鰭をもたない。身の横断形は紡錘形と略円形の 2 種がある。A 群は鈕の突線の表現と、川焼台 1 号の身の表裏を矢羽根（有軸羽状）文が袈裟襷状に施してあることから、銅鐸でも突線鈕式のうち三遠式銅鐸をモデルとして製作されたことが分かる。製作地は三遠式銅鐸の鋳造地域である東海西部域と考えるのが妥当である。

午王山遺跡 A 溝から出土した 3 点の銅鐸形土製品のうち 5 次調査 B 区・7 次調査出土品は横断形が紡錘形を呈する身の両側に粘土紐が貼付されて鰭が表現されている。一方、3 次調査出土品は横断形が円形で、鰭の表現がない。向山遺跡の 2 例もこうした二者があり、小銅鐸 A 群と B 群をモデルとして作り分けたと考えられる。すなわち小銅鐸の 2 群を識別することが可能な作り手でしか製作することはできず、小銅鐸の識別のみならず小銅鐸を用いる儀礼の意味も知っていたと考えるべきであろう。そして、午王山・向山両遺跡の銅鐸形土製品



第 252 図 弥生後期の青銅器関連遺物の分布（石川 2011 に加筆）

凡例： ◆小銅鐸 A 群 ■小銅鐸 B 群 ○銅鐸形土製品 ●巴形銅器 ★筒形青銅器 ▼有鉤銅鉏
●带状円環銅鉏

はその時期を明確に判断できる点でも重要である。午王山遺跡ではA溝の中層から出土しており、菊川式の影響色濃い下戸塚式の範疇に収まる。向山遺跡では、竪穴住居の床下から出土した（埋納か？）小銅鐸B群を模倣した完形品は、身の上部を横断するようにハケ目沈線文を1条巡らしているから、菊川式・下戸塚式段階に属すと判断できる。東海西部の編年に対比すると山中式後半から廻間I式に併行し、三遠式・近畿式突線鈕式銅鐸がまさしく終焉を迎える段階に当たっている。この段階に小銅鐸が東海道筋を東方に波及し、その分布の東端の午王山遺跡一帯でその形態的特徴を識別し、そしておそらくは祭祀儀礼も知る人々によって土製品にその形が写されたことになる。

こうした段階に関東にもたらされた青銅器は小銅鐸だけではない。濃尾平野以西で製作された有鉤銅釧や筒形青銅器が神奈川・千葉両県域でも散見される。これらの青銅器が東海道筋でもたらされたのと好対照をなすのが巴形銅器で、群馬県新保遺跡や茨城県一本松・宮平両遺跡でみられ、長野県上田市武石遺跡でも発見されていることからみて、長野県の千曲川水系を経由して北陸方面から北関東へともたらされたと考えられる。午王山遺跡A溝では帯状円環銅釧が発見されているが、類例は静岡県域・南関東および長野県北部であることから東海道筋と千曲川水系のいずれからと考えるべきか判断が迷うが、少なくともいずれかの地域との交流を通じてもたらされたことに違いはない。

午王山遺跡は、中期後半に小規模な集落として現れ、後期初頭の空白期を挟んで後期前半から後半にかけて存続した。後期の午王山集落は、当地域の拠点として遠隔地との交流を重ね、地域社会の再編成を牽引した。この集落の後半段階になると、荒川周辺の台地上には大規模集落群が形成され、それが次なる古墳時代社会を生み出す基盤となった。こうした動向は、午王山遺跡単独でも、荒川下流域だけでも達成しえたわけではなく、まさしく日本列島各地の地域社会が連携して急激に次なる時代へと変革していく状況と連動していた。午王山遺跡はそうした地域社会の歴史動態をみごとに体現した遺跡というべきである。

【引用・参考文献（挿図出典を含む）】

- 石川日出志 2008「地域からの視点と弥生時代研究」『地域と文化の考古学』Ⅱ pp. 23 - 38 六一書房
 石川日出志 2011「関東地域」『講座日本の考古学』5 弥生時代（上） pp. 397 - 429 青木書店
 江原 順 2016『第31回企画展 小さな銅鐸を追って—銅鐸形土製品と小銅鐸—』朝霞市博物館
 岡村 渉 2005『特別史跡登呂遺跡一再発掘調査報告書（考古学調査編）一』静岡市教育委員会
 小高幸男 1999『高砂遺跡Ⅱ』君津郡市文化財センター
 神尾恵一 2012「銅鐸形土製品祭祀の研究」『古文化談叢』第67集 pp. 177 - 221
 小林理恵 1995「西台遺跡」『板橋区史 資料編1 考古』pp. 502 - 507 板橋区
 齋藤瑞穂 2010「下戸塚式という視点」『古代』第123号 pp. 53 - 72 早稲田考古学会
 西川修一 1991「相模弥生後期社会の研究」『古代探叢』Ⅲ pp. 249 - 273 早稲田大学出版部
 村上吉正・小滝勉ほか 1992『神崎遺跡発掘調査報告書』綾瀬市埋蔵文化財調査報告2 綾瀬市教育委員会